

思ひ草

第18号

平成27(2015)年12月9日 発行

「魅力ある教師とは」～「人間開発」の視点から～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



魅力ある教師とは、自分にとって、どのような先生であったらうかと考える時、あるキーワードが浮かんできます。それは、「出会い」です。では、「出会い」とは何でしょうか。

私は、受容と創造と、とらえます。出会いとは、「異なる二つの立場の者が、互いに受け入れ合って(受容)、そこから新しい何か生まれること(創造)」と、定義しています。たとえば、太鼓と太鼓のバチが互いに受け入れ合って(受容)、そこからリズムが生まれる(創造)ように、です。

自分の学校生活を振り返って、出会ったと思える先生は、教える側と教わる側という異なる立場を超えて、自分を理解し、受け入れてくれた先生でしょう。しかも、そこから互いに、信頼、尊敬、畏敬、友情などの心情が生まれています(創造)。

10数年前まで、学生を連れて毎年、共同作業所に田植えのボランティアに行っていました。近所の子どもたちが田植えのボランティア体験ができるように、午前中、学生たちと岩肌に根付いているアザミを掻き落とし、遠くに運ぶ作業をしていま

した。ところが、昼食の時間になってもM子は帰って来ません。M子は養護学校高等部を出たばかり。触るとチクチクと痛いのに、M子は暫くして遠くに捨てたアザミを胸いっぱい抱いて帰って来ました。そして、「花きれいなね。花きれいなね」と言いながら、アザミの花を1本ずつ牛乳瓶に差していくのです。

この優しさは、個人の性格の範疇の問題ではありません。ともすれば人々は、事物を必要か否かという物差しで見えてしまいます。しかし、M子の優しさは、広く宇宙を包み込むような深い優しさなのです。所長も感嘆の声。「野の花の心がわかるのか、この子。お世話の子と思っていたM子に教えられた」、と。この時、私たちは初めて、M子と出会ったのです。

少なくとも'Education'を「教育」という視点すなわち出来の良さへの称賛あつての人格的尊重という良いモデルでとらえては、「出会い」は困難です。その子に寄り添い、人格を全面的に受け入れ、包み込む「人間開発」の視点から、真の「出会い」は生まれます。

子どもの成長に出会える仕事

教育実践総合センター准教授 からさわ 唐沢 はるみ



今年の4月から教育実践総合センターで仕事をしています。38年間東京都の公立幼稚園で教諭、副園長、園長として幼稚園教育にかかわってきました。この経験を生かして学生の皆さんの実習、採用試験、就職等にかかわるサポートをしていきたいと思えます。

子どもとかかわる仕事は、毎日子どもたちの様々な成長の場面に会うことができる素晴らしい仕事です。例えば、3歳児が園服のボタンを初めて自分ではめられてにっこりした場面。4歳児が空箱で車を試行錯誤しながら工夫して作り、「できた」と満足した表情を見せた場面。5歳児が自分の思いだけでなく友達のを考えを受け入れ、友達と折り合いをつけてごっこ遊びを楽しむようになった場面などです。このように毎日の生活の中でそれぞれの子どもの成長の場面に会うことができるのです。

ある保護者の方が保育参観後、こんなことをおっしゃいました。「子どもたちの表情が生生きとしていて園にいる数時間にとっても多くのことを経験し楽しんでいるのだとわかりました。」幼稚園の教育を理解していただけた嬉しい感想でした。

私は教師や保育士には次の3つのことが大切だと思っています。1つめは、「楽しさの共感」です。子どもが楽しんでいることを一緒に楽しみ、共感することができるということです。これは子どもとの信頼関係を築く上での基本です。2つめは、「幼児理解」です。子どもの遊びの姿や行動を見守りながらその幼児の思いや思考の流れを読み取るということです。特に気になる幼児や支援の必要な幼児に対しては、その幼児の気持ちに寄り添い、幼児の言動から楽しんでいることや困っていることを読み取ることが重要です。3つめは、「保育の省察」です。私もそうでしたが、「今日の保育はうまくいった」と思える日はめったにありません。子どもの姿を思い起こし、保育を振り返り、次の日の保育に生かしていくことにより保育は向上していきます。

子どもからたくさんの喜びやエネルギーをもらえる素晴らしい仕事を目指す学生の皆さんをしっかりとサポートしていきたいと思えます。

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

教育実習 学校や園での実習から多くのことを学びました

教育実習 ～成長への旅路～

人間開発学部教授 池田 行伸

平成25年4月に子ども支援学科第一期生が入学し、今年をはじめその学生たちが幼稚園教育実習を行うことになりました。先輩のいない一期生たちは実践の場に赴くことに少しばかりの期待と大きな不安を抱いていたように思います。このような学生を見ると私の教育実習が思い出されます。

中高社会科の教員免許状取得をめざしていた私は、母校の高校の倫理社会の教師の元で実習を行うことになりました。1、2回参観したあと、いきなり担当教師からその後の授業を任せると言われました。その教師が病気治療のため通院しなければならなかったからです。与えられた箇所はプラトン、アリストテレスのギリシャ哲学者の倫理でした。高校2年生がおもしろがって聴くとは思えない箇所です。実習は私の好み、得意、不得意を聞いてはくれません。仕方なく教案作りに取りかかりました。二人の思想を私が知っている限りストレートに伝えようと思いました。生徒にあくびされても居眠りされても仕方ないと腹をくくりました。私が高校生の時そうでしたから。いよいよ授業、はじめは教育実習生がどのような話をするのか興味を抱いていた生徒たちも、予想どおりだに関心を無くしていくのが分かりました。最後の授業の時、生徒に対し実習をさせていただいたことへのお礼とお別れの挨拶をしました。直後、最前列に座り、唯一熱心に授業を聞いていた生徒が、いきなり拍手しはじめました。かなり長く拍手している間、私も他の生徒たちもただあっけにとられていました。教室を出ると、一人の生徒だけでも伝えられた喜びが私の胸に湧き上がり満ち足りた気持ちになりました。

実習に行くと大学では味わえないたくさんの経験と感動をもらいます。「先生、実習楽しかった。」「子どもたちが先生、先生と言って集まってきたよ。」と満面の笑みをたたえ報告に来た学生が、一回りも二回りも大きくなったように感じました。教育実習は実習生にも子どもたちにも新たな息吹を与えるものだと思います。

教育実習 ～信頼される教師になるために～

初等教育学科 3年 和田 麻依

わたしは、母校である相模原市立大沼小学校で実習を行いました。担当する学年は3年生でした。一生懸命に取り組む子どもたちやきめ細やかなご指導をしてくださる先生方に支えられ、とても恵まれた環境のなかで実習をさせて頂きました。

教育実習に取り組むにあたって、わたしが決めた目標は「子ども一人ひとりと信頼関係を築く」ということでした。クラスの全員と関わり、一人ひとりの特徴をとらえようと心がけました。そのために毎日欠かさず行っていたことは朝の挨拶でした。一人ひとりに声かけをすることで今日の様子や体調の変化に気付くことができます。また、休み時間には自分から遊ぼうと声をかけてこない子やあまり外遊びをしない子を誘って男女一緒にドッジボールなどをして遊ぶことが日課でした。

子どもたちと一番距離を縮めることができたのは、体育の研究授業でした。マット運動の単元で、ひとつでも多くの技ができるように個人指導を心がけました。「側転ができるようになったよ！」「倒立を教えてほしい！」などと子どもたちからたくさん声をかけてくれました。それに応えようと私も全力で支援を行いました。授業を終えた後に、「とても楽しかった！」「できる技が増えた！」と喜んでいる子どもたちの笑顔を見て、「頑張ってたよな。」と思いました。教師という職業は子どもの成長を一番近くで感じられる素晴らしい職業だと実感することができました。

クラスの子もたちは担任の先生のことが大好きでした。先生はしっかりと子どもを見て、常に全力で子どもと向き合っていました。子どもたちはいつも本気で向き合ってくれる、愛情をもった指導をする先生に信頼を寄せていました。その先生の背中を見て、いつか私もたくさんの子もたちから信頼される先生になりたいと心からそう思いました。子どもたちや先生方から学んだことを生かして今度は私が教師になり、恩返しをしていきたいと思います。

教育実習

子ども支援学科の学生も実習で学びを深めています！

連続的関わりの大切さ

子ども支援学科 3年 宿谷 唯乃

私は、母園である四恩幼稚園で二週間の教育実習をさせて頂いた。二年生の時には教育インターンシップでもお世話になった。今回の教育実習では、子どもたちと連続的に関わり、様子を観察することで、教育インターンシップとはまた違う経験や学びをすることが出来た。

毎朝園庭の掃除をしているときに登園してくる子どもたちに「〇〇ちゃん、おはようございます」と挨拶をしても、初めの頃は顔をじっと見つめるだけで返ってこないこともあったが、日が経つにつれて目が合ったり、私の姿を見るだけで元気に挨拶を返してくれたりするようになった。この朝の挨拶一つでも、毎日交わしていると子どもたち一人一人の表情や様子を見ていて少し元気がないと、「昨日はよく眠れなかったのだろうか」、「朝ご飯はきちんと食べられたのか」、「今日はお母さんと離れたくなかったのかもしれない」と子どもの気持ちを考えたり、読みとったりすることが出来た。これらは子どもたちの毎日の様子を見ていからこそ感じられることだと実感した。

また、教育インターンシップに行っていたからこそ感じられたこともあった。去年の六月のインターンで年少クラスに参加したときに、人一倍大きな声で歌うA(女児)がいた。Aが特に目に留まって、私は観察することが多かった。六月だったこともあり、他の子どもたちにも環境にも慣れていないためか、友達と何かを共有して楽しむ様子は見られず、表情は硬かった。しかし、私が今回の実習で年中ク

ラスに入ると、身長も大きくなり、成長したAがいた。友達と一緒に楽しく遊ぶ姿や、真剣な表情で活動に取り組む姿、友達が泣いていた、困ったりしているときに声を掛ける思いやりの心も育っていて、私は実習をする中で、たくさんの変化を感じる事が出来た。

子どもたちの成長を感じることは本当に感動させられることばかりだった。また、部分実習では「失敗してしまったらどうしよう」という気持ちでいっぱいになっていたところに、「間違えてもいいんだよ」という子どもたちのさりげない一言に緊張は解け、「何よりも子どもたちが楽しく出来る事が一番ではないか」と気付かされた。そして、子どもたちの笑顔と「楽しかった」という言葉に充実感とやりがいを感じた。実習を通して子どもたちの純粋な言葉や表情に気付かされること、学ぶことは本当にたくさんあると実感した。これが保育のやりがいであり、楽しさであると感じ、私は改めて保育者になりたいと思った。

二週間の実習はとても充実したものだった。子どもたちと連続的に関わることで、子どもたち一人一人の違いはもちろん、年齢による発達の違い、クラスの雰囲気の違い等を感じ取ることが出来た。保育現場でしか感じられないことはたくさんあり、それらを感じられるかどうかは自分の学ぶ姿勢はもちろん、いかに子どもたちに寄り添って考えられるかだと思った。来年の六月には同じ園で責任実習をさせて頂く。これまでの経験、学んだことを生かして、子どもたちの主体性を伸ばせるような活動が出来るように日々の勉強に励んでいきたい。

教育インターンシップ

活動記録を紹介します！

健康体育学科2年
松島彩乃さんの記録です

1校時(1年生 国語)
『おばさんとおばあさん』
・音読
・平仮名「え」「お」書く練習

2校時(1年生 国語)
『ぶんをつくらう』
・画用紙に「〜が…する。」という文を書く

書いた時と発音時の違いを発見する
例：①おねえさん ②おねーさん
・子どもたちに「あ・い・う・え・お」それぞれの音ののぼりことばを発表させていた。
・発表したことも否定せず、「ういっすどうなの？」という返答もしていた。

○ ○
○ ○
○ ○
○ ○
○ ○
○ ○
○ ○
○ ○
○ ○
○ ○

・文の最後に「〜を〜する」ことが大切。
・〜が…するという文とたくさん考える時間があった。

・野菜を切る

○ 包丁の使い方
→ 野菜を押しこめる指が1枚伸びてしまえば指が1枚だけになる。
★ 指を曲げて、木杓を軽く押しこめ包丁を支える

・肉を切る
・卵の殻をむく → フックでフック

健康体育学科2年
村山優奈さんの記録です

教育実践総合センター夏季教育講座 8月23日(日)、国語実践フォーラムを行いました

豊かな言葉の学び手を育てる

子ども支援学科 助教 よしなが あさと 吉永 安里

本年度、第7回目を迎える教育実践総合センター主催夏季教育講座は、「豊かな言葉の学び手を育てるこれからの国語教育」をテーマに開催されました。



文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の水戸部修治先生をお迎えし、「課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ国語科の授業づくり」についてご講演いただきました。水戸部先生の気さくなお人柄と軽妙洒脱なお話しぶりにフロアは一気に和やかで楽しい雰囲気に包まれ、最新の教育動向についての興味深い話題に引き込まれていきました。基礎的・基本的な知識・技能とともに、思考力・判断力・表現力といった汎用的能力を主体性・協働性を発揮しながら高めていく、アクティブ・ラーニングを取り入れた国語の授業づくりについて、実践例を交えながら分かりやすくお話くださいました。

講演の後は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」、「伝統的な言語文化」の4つの分科会に分かれて、横浜市、川崎市、横須賀市、東京都の先生方の意欲的かつ先進的な実践報告を伺いました。子どもや地域の実態に即した学習内容や言語活動が練りに練られ、このクラスの子ども達だからこそ関心と必要感をもって学習に取り組めるのだと感じさせる、優れた実践ばかりでした。先生方の授業を生き生きと語るご様子に、私までクラスの子どもの一人になったような温かい気持ちにさせられました。子どもに対する深い愛情と洞察、最新の教育動向についての見識、そしてそれを授業づくりと指導・省察につなげていく豊かな発想力と的確な指導力、真摯なりフレクション。これらを兼ね備えた8人の先生方のご報告と、さらに熟達した指導力と幅広い知見をお持ちの司会の4人の先生方のご講評

はとても新鮮で刺激的なもので、フロアの先生方の明日の授業へのモチベーションを高めるものとなったことでしょう。

講座を締めくくるシンポジウムでは、東京学芸大学国語科教育分野の中村和弘准教授、横浜市教育委員会の伊藤洋子主任指導主事、本学文学部の秋澤互教授に、これからの国語教育の展望をお話していただきました。中村先生のコンピテンシー・ベースの授業づくりのご提案、伊藤先生の横浜市の授業改善に向けた具体的な取り組みのご様子、秋澤先生の伝統的な言語文化の授業のさらなる充実に向けてのご見解と、それぞれの高い専門性に裏打ちされたご提言に頷くことばかりでした。



実践、行政、研究の様々なお立場の先生方から示唆に富んだお話をたくさん伺い、豊かな言葉の学び手を育てるためには、まず国語教育に携わる大人自身が豊かな言葉の学び手であること、また豊かな言葉の学びに対する明確なヴィジョンをもつことが大切であると強く実感させられる、学び多き一日となりました。